

前、私が名大にいた頃までは、惑星大気の運動と輻射と雲だけが気象学の射程内にあるような気がしていたことを考えると、進歩のスピードと新領域を開拓する能力に関して、このシンポジウムの意義と言い、京大基礎物理研のグループと言い、共同利用研究所がもっている実力

をまざまざと見る思いだった。

我々の気象界も、共同利用の大気物理研究所を、早く創設しなければ、日本の気象学が現代科学からとり残される危険のあることを、あらためて痛感させられたシンポジウムであった。

〔書評〕

E. H. ランズバーグ著 倉嶋厚・田崎允一訳 からだと天気—生気象学入門—

新書版 198ページ, 390円, 1970年8月 河出書房新社

1956年マサチューセッツ工科大学に物理学の学習と実験の委員会が設けられ、Science Study Series という漸新な、かつ理解し易い図書が発行されている。本書はその5番目のよみ易い訳書である。各章の題目は、1. 大気とは何か、2. 空気と高度、3. 太陽と日焼け、4. 環境と人間、5. 寒さに耐える、6. 暑さに耐える、7. 気候・人間の進化及び文明、8. 都市気候、9. 天気・仕事・行動、10. 気象病、11. 伝染病と天気、12. 気候・気候順応・治療、であって、訳者のこれまたユニークなあとがきを合せて186ページ、他に用語解説などの3付録と便利な索引12ページがつく。

200ページ足らずだが、本書の内容はことごとく新鮮なものばかりなので読みごたえがある。2, 3の例を挙げて見よう。アメリカ軍兵士が世界各地に駐屯した経験から得た本書第4図によれば、年平均気温 -30°C の所では、1日5000キロカロリー の食事を必要とするのに対し、 31°C の所では3000キロカロリーで済み、この間気温と摂取量との関係はほとんど直線と見てよい。この図が朝日新聞の「週末の天気」欄に引用されていたのもこの新しさの為だろう。

新しい表もある。それは中・高緯度の都市で14の都市的気候要素が田園に較べてどう変わるかを示している。暖房の必要性は10%減り、雲量は5~10%増し、ガス状

汚染物質は500~2500%増加するという類である。このような数字は局所に目を奪われると、到底書けるものではないが、多くのデータから思い切ってまとめた点に感服する。

本書で特に統一性を感じるのは、高・低気圧の通過過程を6相に分けていることである。高気圧前面を1、高気圧下を2、背面つまり低気圧前面を3、低気圧温暖域下を4、寒冷域下を5、これから高気圧への漸移域を6とし、この相と各種身体状況とを繰返し照合している。とくに4の相では、テストの反応が遅い(p.125)、自殺が多い(p.127)、一方、試験成績が20%増すこともある(p.128)、心臓病に効くジキタリス製剤の致死量は5の相も含めて4の相で顕著になる(p.165)、あとがきにはいると、電話で感情の行き違うのも、咯血患者の出るのも、芥川竜之介の自殺したのもみなこの4の相である(p.180~181)というように、極めて示唆に富む多くの事例を各所に示している。

最後に、これは通読者の了解の悪さであろうが、1MET=50Kcal/m³·hour という身体の発熱量(p.46)を単位にした場合、中程度の重労働が300MET となっている(p.76)のは、何か大きすぎるように思われる。いつか御教示願えれば幸である。

(浅井辰郎)